

見えてきた

新型コロナウイルスの正体

掛谷英紀

新型コロナウイルス感染症のパンデミックは、なぜ起こったのか？ 新型コロナウイルスが研究所起源である可能性を科学者たちは否定し続けていたが、その証拠は次々に裏付けられている。世界を震撼させた新型コロナウイルスがどこから来たのか？ その真実が明らかになりつつある。

写真提供：アフロ



かけや・ひでき／筑波大学システム情報系准教授
1970年大阪府生まれ。東京大学理学部生物化学科卒業。同大学院

工学系研究科先端学際工学専攻博士課程修了。
博士（工学）。通信総合研究所（現・情報通信
研究機構）研究員を経て退職。専門はメディア
工学。著書に『学問とは何か』『学者のワゴン』『先
見刀』の授業『学者の暴走』など。

新型コロナウイルスは研究所から流出？

新型コロナウイルス（SARS-CoV-2（※1））が研究所起源である可能性が極めて高いことは、日本ではほとんど報道されていない。日本のメディアは中国に付度してか、天然起源を支持する情報は積極的に紹介するが、研究所起源を示唆する情報はほとんど紹介しなかった。米国のFBI（連邦捜査局）とエネルギー省が研究所起源との見解を出した際、それを紹介した程度である。一方、米国では政府機関が公式見解を出していることから分かる通り、研究所起源であることの合意形成が進んでいる。それを示す状況証拠が多数積み上がっているからだ。

2024年5月から6月にかけて、米国連邦議会では

※1：新型コロナウイルスの正式名称

世界を変えたウイルス 5年目の真実

新型コロナウイルスの起源について重要な公聴会が相次いで開かれた。医師でもあるブラッド・ウエンストラック議員を議長とする米下院コロナウイルスパンデミック特別小委員会では、まず5月1日にNIH（※2）の研究費を共同研究先の武漢ウイルス研究所に配っていた非営利組織「エコヘルス・アライアンス」のピーター・ダシヤック代表が証言に立った。そこでは、共和党の議員だけでなく、それまでウイルス学者を守る側に立ってきた民主党の議員たちまで、研究報告書の提出遅れや内容の改竄などといったダシヤックの不正を厳しく追及した。

続いて5月16日の米下院公聴会では、NIHの首席所長代理であるローレンス・タバックが、NIHの研究費が機能獲得研究（病原体の感染性や毒性を意図的に強める研究）に使われたことを認めた。さらに5月22日の公聴会でも、NIH（※3）の最高顧問としてファウチ（NIH所長）のアドバイザーを務めたデビッド・モレンズも情報隠蔽を厳しく追及された。

しかしながら、6月3日のファウチを証人に招いた公聴会では、共和党議員は厳しい質問を浴びせたが、民主党はファウチを守る姿勢に終始した。ファウチは、新型コロナウイルスが研究所起源の可能性は否定できないと

認めた上で、たとえ武漢ウイルス研究所で人工合成されたものであったとしてもNIHの研究費で行われたものではないと主張した。

一方、米上院では6月18日に公聴会が開かれた。医師でバイオベンチャーを経営するステイブン・クエイ博士は、新型コロナウイルスが研究所起源であることを示唆する証拠は多数積み上がっており、これが自然発生した確率は10億分の1だと証言した。ラトガーズ大学のリチャード・エブライト教授も、新型コロナウイルスが研究所起源であることを示す証拠は沢山あるが、天然起源であることを示す証拠はゼロだと証言した。

これに対して、ファウチを議会で追及してきたことで知られるランド・ポール議員（共和党）は「（新型コロナウイルス研究所起源という）右翼の陰謀論を主張しているのは共和党を狂信的に支持する人たちだと言われているが、あなたもその一人ですか」とエブライト教授に質問した。これに対して彼は、「私は登録している民主党員であり、大統領選挙ではバイデンに投票し自宅の庭の芝生にバイデン応援の看板を立て、自分の車にはバイデン応援のボードを掲げていた」と答え大きな笑いを誘った。

※2：米国立衛生研究所

※3：米国立アレルギー・感染症研究所

ところが、こうした米議会の議論は日本では全く報じられていない。そのため、今でも日本では新型コロナウイルス研究所起源説を陰謀論だと思っている人が非常に多い。

新型コロナウイルスは人工合成された？

新型コロナウイルスが研究所で人工合成されたことを示す科学的証拠は多数あるが、そのうち主要なものとして以下の4つを挙げることができる。

- ① スパイクトタンパクが最初からヒトのACE2受容体に最も結合しやすいようになっていた。
- ② 他のSARS系ウイルスには全くない、細胞内に侵入しやすくする配列（フリーリン切断部位）がスパイクタンパクに挿入されている。
- ③ 8万以上のサンプルを調査しても中間宿主（ヒトに感染させた動物）が見つからない（SARSやMARSでは数カ月のうちに見つかった）。④ 制限酵素切断部位というウイルス人工合成に必要な部位が、合成に都合のいい箇所に配置されている。

これらの4つはそれぞれ独立した事象なので、1つひ

とつが偶然千分の1の確率で自然に起きたとしても、それらが同時に起きる確率は1兆分の1になる。

これらの証拠のうち、最初の3つは2020年の段階で既に注目されていた。それでも、2020年時点で研究所起源説を公に論じる科学者の数は非常に限られていた。実際、日本では筆者のみであった。

それが大きく転換したのが2021年9月である。エコヘルス・アライアンスとノースカロライナ大学、武漢ウイルス研究所を含む研究グループがDARPA（※4）に提出していた研究予算申請書（DEFUSEプロジェクト）が流出したのである。この申請書の研究計画に、フリーリン切断部位を人工的に挿入する実験計画が書かれていた。これが明るみになったことで、欧米の生命科学者の多くが研究所起源説支持に傾いた。

天然説を主張するウイルス学者たちは、DEFUSEの実験はノースカロライナ大学で行われる予定だったのだから武漢ウイルス研究所とは関係ない、フリーリン切断部位の入れ方は色々あり、新型コロナウイルスのようにスパイクタンパクのS1部位とS2部位の間に入れるとはDEFUSEには書かれていないと反論し、研究所起源説を必死に退けようとした。

世界を変えたウイルス 5年目の真実

ウイルス流出は予見されていた？

それに完全に反駁する証拠が2024年の1月に出た。
「US Right to Know」（以下、USRTK）という米国の団体が米政府研究機関の米国地質調査所に情報公開請求をかけて入手した書類である。USRTKはこれまで多くの情報公開請求をしてきたことで知られる。しかしながら、多くの政府組織は公開に応じてもその多くを黒塗りにするなど、極めて非協力的な態度を示してきた。

そこでUSRTKが注目したのが地質調査所だった。この組織は、先述したDEFUSEプロジェクトの研究費申請の共同研究者として名を連ねていた。この組織ならば情報機関や保健行政機関と違い、情報を隠す動機がないと目をつけたのである。結果として、その目論見は当たった。地質調査所はDEFUSEプロジェクトに関する詳細な資料の公開に応じたのである。公開された資料の中には、マイクロソフト・ワードの校閲機能を使った研究費申請書の編集履歴が残されており、そこに重要な情報が多数含まれていた。

前述の通り、研究所起源を否定するウイルス学者たちは、実験はノースカロライナ大学で実施する予定と書か

れていたのだから武漢研究所は関係ないと主張してきた。ところが、研究計画書草稿の当該箇所には、ダシヤックがワードのコメント機能を使って「DARPAが心配しないように、全ての仕事はラルフ（ノースカロライナ大学教授）によって行われることにしておいて、予算を獲得したらどこでどの仕事をするか割り振ろう。実際には多くの分析は武漢で行

われることになる」と書いていたのである。それに対して、ラルフ・バリック教授は「米国では、ヒトの細胞に結合して増える組み換えSARSウイルスの研究はBSL2（※5）ではなくBSL3（※6）の実験室で行われる。武漢ではBSL2で行われるだろう。米国の研究者はそれを知ったら



写真提供：共同通信

安全性の低いBSL2の施設である中国科学院武漢ウイルス研究所、杜撰な安全管理が以前から指摘され、新型コロナウイルスの流出が疑われる

※5：安全性の低い研究施設

※6：安全性の高い研究施設

驚くぞ」と書いていた。つまり、彼らはSARSウイルスの危険な組み換え実験を、安全性の低い中国の研究施設で実施する意図がもたらあつたのである。

新型コロナ研究所起源の決定的証拠！

また、フリーン切断部位の挿入箇所についても、新型コロナウイルスと同じスパイクタンパクのS1とS2の間に入れる計画が明記されていた。さらに決定的だったのは、全長のウイルスの塩基配列を合成するのに6つのピースを制限酵素でつなぎ合わせるという計画が明記されていたことである。具体的な制限酵素の発注履歴も含まれていた。この部分が④の証拠に相当する。じつはこの証拠が出る前から、新型コロナウイルスは6つの部品を制限酵素でつなぎ合わせて作ったであろうことが、ある論文で予言されていたのである。

2022年10月、日本語で「エンドヌクレアーゼ^{※7}の指紋はSARS-CoV-2の人工合成を示唆する」という題目のプレプリント（査読前論文）が公開されていた。この論文の著者はドイツ人免疫学者のパレンティン・ブルツテル、米国の数理生物学者アレックス・ウォッシュバーン、米国の脳神経学者アントニウス・ヴァンド

ンゲン（デューク大学准教授）である。この論文の主なアイデアはウォッシュバーンによるところが大きいと思われる。ウォッシュバーンはプリンストン大学で博士号をとった若手研究者で、自らベンチャー企業を立ち上げている。彼は生物学の世界には珍しく、数理的能力が非常に高い人物である。実際、その能力を生かし、投資のアドバイザーなども行っている。

ウォッシュバーンらは新型コロナウイルスの制限酵素切断部位の配置に注目した。制限酵素はDNAの特定の配列を認識して、その部分あるいはそれに続く部分を持異的に切断する機能をもつ。彼らは武漢ウイルス研究所などが使っている制限酵素によって切断される部位が、等間隔に近い形で並んでいることに気づいた。

新型コロナウイルスのRNAは約3万塩基からなり、RNAウイルスの中では非常に長い。そのため、いくつかの部品に分け、それをつなぎ合わせて作るのが一般的である。その際、それぞれの部品が長すぎないことが望ましい。新型コロナウイルスの制限酵素切断部位の配置は、その人工合成に好都合な条件を満たしていたのである。

ウォッシュバーンらは、新型コロナウイルスはBsa

※7：DNAを切断する酵素

IとBsmBIという2種類の酵素を使って、6つのピースをつなぎ合わせて作られているとの仮説を論文で披露した。これに対して、ネイチャー・メディスン誌に掲載された新型コロナウイルス天然起源論文の筆頭著者であるクリスチャン・アンダーセンは「幼稚園レベルの分子生物学だ」と揶揄していた。だが、実際はウォッシュバーンの方が正しかったのである。

前述のリチャード・エブライト教授はこの書類が出現するまで、研究所起源の可能性は高いがまだ断言できないという立場をとってきたが、情報公開されたDEFUSEの草稿を見て「エコヘルス・アライアンス（武漢ウイルス研究所に米国の研究費を流していたNGO）とその仲間がこのパンデミックを起こしたことを疑う余地はゼロになった」とX（旧ツイッター）にポストした。

分子生物学者のフリップ・バックホルツ教授（サウスカロライナ大学）と分子遺伝学者のケビン・マッカーナンも、それぞれ「事件は解決した」「これは動かぬ証拠であるだけでなく、殺人の告白メモである」とXにポストした。さらに、2021年に分子生物学者のアリーナ・チャンと新型コロナウイルスの起源に関する共著書「Virus」を書いたサイエンス・ライターのマット・リドレー

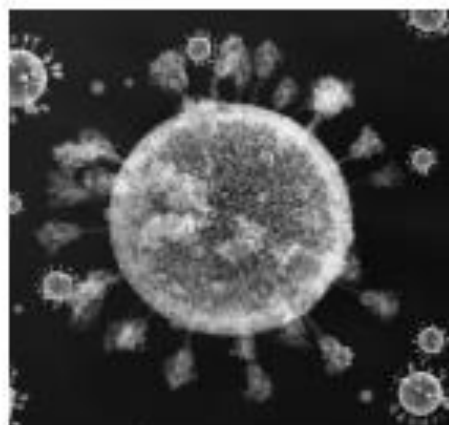
も「ゲームオーバーだ」とXにポストしている。

オミクロン株も人工合成された!?

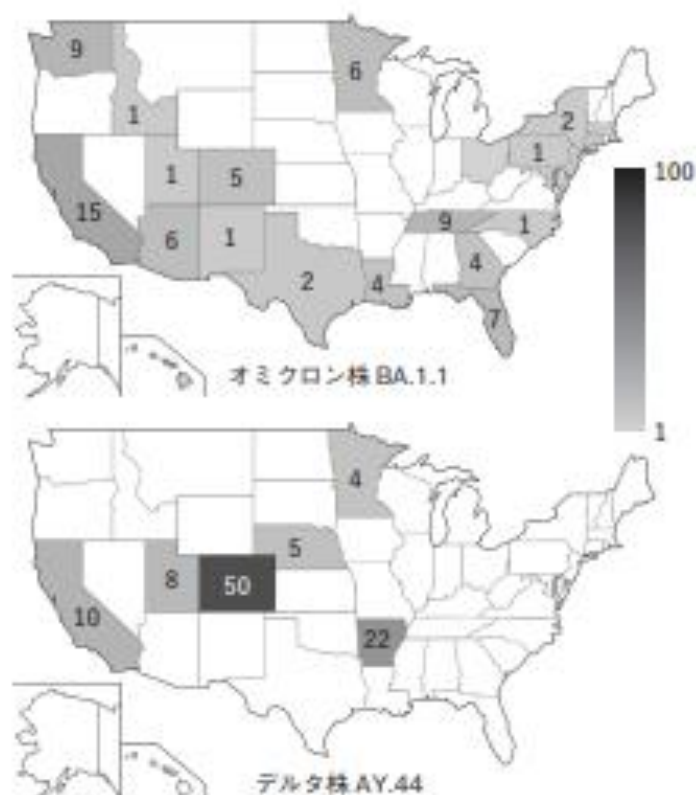
以上は武漢株の起源についてだが、じつはオミクロン株についても人工的に合成されたことを示唆する証拠が出ている。その具体的な証拠の一つは、ウイルス学者の宮沢孝幸氏の著書「新型コロナウイルスは人工物か?」（PHP新書）で示されている。もともと筆者も同じ意見で、オミクロン株は非天然起源である可能性が高いことを計算により示した査読付き論文も1本書いている。

ただしオミクロン株がどのように広がったかについては、筆者と宮沢氏は全く異なる意見だった。宮沢氏は意図的に撒いたとの見解を示していたが、筆者はさすがにそれを信じられず、武漢株と同様に何らかの事故による流出と考えていた。

自然に発生したものであっても事故による流出であっても、検出



オミクロン株イメージ 写真提供：アフロ



遺伝子データベース GenBankに登録された最初の100サンプルが採取された州と、それぞれの州での採取数

された場所と時期を追えば発生源や流出源から広がった様子が確認できる。そこで、宮沢氏らが見出したオミクロン株の復帰変異株（一部が武漢株に戻っているもの）が、米国のどこから広がったかを調べてみた。

その結果はプレプリント論文で公表しているが、結論を言うと発生直後から全米に広がっていたのである。普通の変異株は、最初に感染が発見された場所から徐々に

周囲に広がる様子を確認できるが、オミクロン復帰変異株の拡散はそれとは全く違う様相を見せている。さらに、復帰変異株に限らず、オミクロン株の BA.1.1 は、他の変異株と違って最初から全米に広がっていたのである（地図）。オミクロン株が意図的に拡散されたものならば、これは許しがたいテロ行為である。

真実は時間とともに明らかにになる

DEFUSE計画に深く関わっているバリックは、2023年9月に仙台で行われたウイルス学会に参加している。そこでの彼の講演後、私は次の質問を投げかけた。「リンファ・ワン（デューク・シンガポール国立大学医学部）は、DEFUSE計画でSARS系のウイルスにフリーリン切断部位を挿入するのはあなたのアイデアだったと言っている。その計画で、あなたはどのようなアミノ酸配列を挿入するつもりだったのか？」

これに対して、彼はフリーリン切断部位の役割を詳しく説明しただけで、私の質問には答えなかった。その後、バリックは米国会議の取り調べで私と全く同じ質問を受けている。そこで彼は「ネコのコロナウイルスにヒントを得た」と証言している。ネコのコロナウイルスのフリー

世界を変えたウイルス 5年目の真実

リン切断部位のアミノ酸配列は数種類あるが、そのうちの1つは新型コロナウイルスのそれと完全に一致する。

そのバリックが2024年12月に淡路島で開かれる国際会議にも来ることになっている。この会議のオーガナイザーには、東京大学の佐藤佳教授のほか武漢ウイルス研究所で実際に新型コロナウイルスの人工合成を指揮したと見られる石正麗も名を連ねる。彼女は「コウモリ女」の異名をもつが、その彼女に新型コロナウイルス合成の技術を教授したのがバリックである。

私はこの会議に前述のオミクロン株の異常について発表するべく申し込みを行ったが、発表だけでなく参加までも拒否された。日本で行われた過去のウイルス学の会議で妨害行為を行ったというのがその理由である。しかし私が行ったのは、発表者に不都合な質問だけである。それを妨害行為とみなすのであれば、もはや科学的議論を放棄したに等しい。

このようにウイルス学者たちは新型コロナウイルスの起源を隠すのに必死だが、世界は大きく動いている。2024年9月29日のデイリーメール紙で、ボリス・ジョンソン元英国首相が2020年3月の段階で同国の情報機関MI6からブリーフィングを受け、新型コロナウイルス

ル研究所起源を確信していたことが報じられた。

さらに、2024年11月5日に行われた米国選挙では共和党が圧勝した。トランプは大統領就任後、バイデン大統領が拒否し続けていた新型コロナウイルス起源に関する政府の機密文書を開示すると期待される。これらの機密文書を既に見ているラトクリフ元国家情報長官（トランプ新政権でCIA長官に就任予定）とレッドフィールド元CDC（疾病予防管理センター）所長は研究所起源を断定しており、これらの文書開示が新型コロナウイルス起源論争に決着をつける可能性は極めて高い。

加えて、上院で共和党が過半数をとったことも注目している。ランド・ポール上院議員は、米国で機密獲得研究に対する規制と監視を強化する「Research Review Act」（危険な研究の審査に関する法案）を提出しており、新政権下で可決が見込まれる。これにより米国の技術によって人工パンデミックが起きるリスクは大きく軽減されるが、その一方で不穏な動きがある。佐藤佳教授が、米国で禁止される研究を日本に誘致する動きを見せているのである。これが進めば、日本が次のパンデミックの発生源になりかねない。日本でも米国同様の法案を成立させることが急務である。